

私たちが考える万博

第6回 能が教える、日本文化の精神

コロナ禍を乗り越え、これからの日本社会を再起動・再構築する場として、大きな役割を果たすであろう大阪・関西万博。その方向性を考えるうえで、池永顧問が重要だと考えるのが世阿弥の教えだ。日本文化のひとつの源流である「能」の形式と思想を学び、現代の日本が取り戻すべき精神は何かを考える。

構成 加藤しのぶ



池永寛明

いけなが・ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに関わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。

世阿弥に学ぶ、 コロナ禍の乗り越え方

「私たちが考える万博」も6回目となりました。コロナ禍2年目に入り再度緊急事態宣言が発令される状況のなか、4年先の2025年大阪・関西万博はこれまでの発想では立ちいかなくなるでしょう。前回の繰り返しになりますがコロナ禍は大断層、明治維新、戦後以来の「リセット」です。大阪・関西万博はそうした「リセット」を踏まえ、新たに創造されたものを体現しなくてはならない。つまり私がこれまで「ルネッセ」で提唱してきた技術と社会をつなぐものが「文化」であるという論点の重要性は、さらに増していると感じています。

前回、世阿弥の『風姿花伝』について少しふれました。なぜ今、世阿弥なのかと問われるのですが、日本文化について考えるなかで、

時代を遡っていけばいくほどどうしても能、そしてそれを確立した世阿弥へとたどり着くのです。たとえば日本料理をひもとくとその根源に茶道がある。そして茶道を深掘りすれば、能と切っても切れない関係性が見出される——文化の核心はそこにあるわけです。

千利休による茶道の大成に遡ること約150年、世阿弥の能は当時の時代背景があって生まれた芸術です。南北朝の動乱期を経て室町幕府が政権の安定に至るうねりの時期のなかに生きたからこそ、世阿弥の「夢幻能」[*]は生まれたといえるでしょう。

これまでもコロナ禍後の社会の論点としてリアルとバーチャルの融合をあげてきました。いつしか「リアルかバーチャルか」の二項対立でしか物事が考えられなくなった現代社会にあって、「リアルもバーチャルも」という「時間」と「場」の変革こそが本質にあります。これは空間と時間の制約から解放たれ

た夢幻能の形式にすでに見られたものです。あらためて我々は能——世阿弥に学ぶべきではないでしょうか。

初心忘るべからず ——大阪・関西万博を考える基本スタンス

少し話が逸れますが、先年10月、大阪のオフィス街に佇む山本能楽堂で、観世流能楽師・山本章弘師との対談が行われました。これまで能楽堂を会場とした講演はあれど、オンライン配信されたのは世界初だったと思います。テーマは「コロナ禍と能」。コロナ禍後の現代社会に能が果たしうる役割を中心に山本師とお話ししましたが、何より能楽堂という場の持つ磁力に興奮したのを覚えています。「見えないものを見ようとする」芸能の舞台となる能楽堂は、その存在そのものが見えるものと見えないものの接続装置であり、だからこそ能ひいては日本文化に学ぶべきこ

とは多いとあらためて思いました。

話を元に戻しましょう。数々残る世阿弥の言葉のなかで最も有名なものに「初心忘るべからず」があります。この言葉は『風姿花伝』にまず表れ、その後も他の著作でさらにその意味を広義に展開しています。我々は「初心」を「原点」と捉えがちですが、世阿弥は原点だけでなく、その年齢ごとに「時々」の初心があり、常に新しいものを積み重ねていくことの重要性を説いています。それを踏まえて下掛宝生流能楽師の安田登師は「初

心忘るべからず」を「折あるごとに古い自己を裁ち切り、新たな自己として生まれ変わることを忘れるな」ということだと説明しています。これこそリセット後の新たな社会に向けた2025年大阪・関西万博における基本スタンスになると思います。

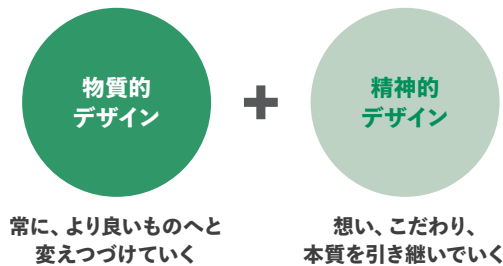
稽古は強かれ ——万博で本場の日本文化を再起動する

稽古は強かれ、情識はなかれ、となり——『風姿花伝』序の言葉です。世阿弥は折々に



2020年10月、大阪市中央区にある山本能楽堂で行われた、観世流能楽師・山本章弘師との対談の様子。写真提供/山本能楽堂

■ 日本的なもの(日本的デザイン)とは



「稽古」の語を用いますが、それは単純に練習を重ねることを言うものではありません。「古(いにしえ)を稽(かんが)えること」の意です。世阿弥は古に立ち返るのではなく、古そのものに学び、そのプロセスを繰り返すことが稽古であると記しています。それを「まねる、うつす、わたす」の3つのプロセスを繰り返すことだと説明したのが松岡正剛氏です。「稽古」の意味を単純に捉えていた私にとっては衝撃的な知見でした。

ここで強調したいのは「まねる、うつす、わたす」のは芸そのものではなく、芸に込められた精神だということです。今、日本の文化から失われているのは精神性です。かつて日本的なもの(日本的デザイン)は「常に、より良いものへと変えつづけていく」とすること(物質的デザイン)と「想い、こだわり、本質を引き継いでいくこと(精神的デザイン)」の両輪が機能していたはずなのに、今は物質的デザインばかりが先行しています。忘れ去られた片輪である精神的デザインを掘り起こし、リセットされた新しい世界を創造するためにも、我々は「初心忘るべからず」「稽古」に精進しながら万博に臨みたいと考えています。

注 * 能において霊的存在が登場し、過去を回想する形で物語が展開する曲。